

別府芳雄教授退職記念号発刊によせて

学長 原 純 子

本学別府芳雄教授は昭和41年4月、助教授として着任されて以来、47年教授にご昇格、経済哲学、社会思想史、経済学、体育理論に至るまで担当されて、地道でたゆみのない研究活動と学生の教育に専念された。そしてこの平成2年3月末を以て定年退職、同年4月1日付で本学の名誉教授とされた。

教授はご経歴にも明らかなように、医学博士号をもたれる異色の経済学者である。本学着任以前は国立信州大学医学部の助教授をつとめられた。一転して経済学に打ちこまれてからは、常に一貫した主題を中心に研鑽をつまれ、目をみはる成果を挙げられたのである。その集大成ともいえるべきものが、本学経済文化研究所発行の研究叢書第1冊全部を占める「人口史観序説——唯物史観から人口史観へ——」である。これは1986年から1990年まで8回にわたって本学の研究論集に掲載された論文をまとめられたものである。その内容は文字通り独創性と意欲に充ちたみのり多いご労作といえる。教授は専任教員としては退職されたが、今年度以降もまた本学の総合講座「生と死」の講師としてご出講下さるし、同研究所の研究会講演もお受け頂いている。以前をしのぐ激しい情熱と、人口史観の一層の精緻な展開に大いに期待しているところである。

学問に対し自らに律しられる教授のきびしい態度は、若い教員諸氏の資格審査のさいなどでも、時として峻烈ともいえる表現でなされたこともある。しかし決して批判に終るのでなく、創意や発想の長所をあますところなく指摘し励まされている。厳正かつ暖かい人間性とバランスのとれたお

人柄を感じたことも多い。

学生への教育・指導については一層そうであった。着任の当初から、当時まだ珍しかった教育機器を、多くの資料とともに活用されていた。学生にはつねに慈愛にみちた温顔で明快な態度で接せられ、数多くの優秀な学生を育ててこられた。本学学生もまた一人の優秀な専任教員を失うことになり、われわれともども、心から残念と申し上げたい。

最後に、私の拝見するところ、教授はなかなかの愛妻家でもおいでになる。学問以外のほとんどのことは奥様と相談され、ゆかしい二人三脚ぶりを発揮されているようにお見受けする。今後もご研究の継続のかたわら、更に深いきずなをつづけていかれることと確信する。お二方とも一層ご健康に留意されて、華麗な定年後のご生活を享受されることをお祈りし、長いご苦勞とご功績に対して深い御礼とお別れのご挨拶とさせていただきます。